

# Child 子どもを守る Saving

23 ヨハン・ガルトゥングさんと  
佐々木久美子さんの対談

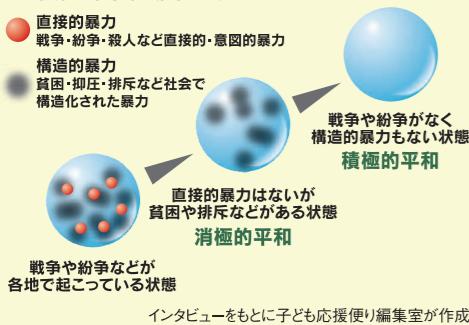


佐々木久美子  
(ささき・くみこ)

日本教職員組合青年部長。  
2002年より岩手県内の小学校教員として勤める。11年岩手県教職員組合青年部常任委員、13年同いわい支部を経て、14年から現職。

企画・構成  
「子ども応援便り」編集長 高比良美穂

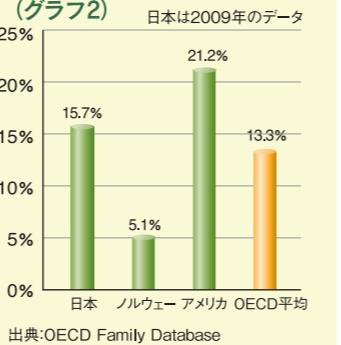
## ■平和学における消極的平和と積極的平和(グラフ1)



## ■日本の子どもの貧困率推移(グラフ1)



## ■各国の「子どもの貧困率」(2010年)(グラフ2)



員自身が、世界の実情を知り、活動することの大切さを実感しています。

**ガルトゥング** 「積極的平和」の実現に教職員のみなさんが果たす役割は非常に大きいです。「平和教育」の基本は、日常生活の様々な対立や矛盾にどう対処するかを学ぶことです。ノルウェーでは、学校が抱える具体的な問題を取り上げ、対話する授業があります。例えば、いじめ、先生と子どもの関係、親子関係、保護者同士の問題にもとりくみます。

**佐々木** 身近にある対立や衝突を解消することが、戦争や紛争のない社会づくりにもつながる、ということですね。

**ガルトゥング** 子どもたち一人ひとりが相手に共感する力を持ち、お互いを尊重し、対話によって身近な問題を解決する経験を積んでいかなければ、地球規模の問題も解決できるようになります。どんな問題であれ、解決のた

めに最も大事なことは対話すること。そして、「なぜか」を探ることです。時には思つてもみなかつた答えが得られることもあります。

ある小学校のこと。5年生の男の子が、1年生の女の子に毎朝嫌がらせをしていました。先生が男の子に「どうしてそんなことをするの?」と問い合わせると、男の子は3度目でようやく答えます。「学校が大嫌い。ぼくは手や体を動かすのが好きなのに、先生が一方的に話す授業ばかり」と。「なぜ先生ではなく女の子をいじめたの」と聞くと、「あらがいました。理由を話した夜、男の子が好きだと分かったから」。

先生が「なぜ?」と問い合わせたことで、彼には自分の悩みを聞いてくれる人ができ、問題の本質が明らかになりました。その影響はすぐに表れました。理由を話した瞬間、あの子は学校が大きくなりました。

佐々木 本当に、この子が大きくなりました。彼の心が変わったことが、他の子たちにとっても大きな影響になりました。

学校でのいじめの問題もテロリストの問題も、根本は共通しています。中国の動向が参考になるでしょう。中国はここ20年で国際貧困ライン(※2)を下回る人の割合を約9分の1に減らし、底上げを図りました。ま



貧困問題から平和教育まで多岐にわたる話題を展開したガルトゥング博士を中心とした左から佐々木久美子、ヨハン・ガルトゥング、高比良美穂。

# 格差や貧困のない社会に向けた真の「平和」のための教育とは?

「子どもを守る」シリーズ 23

戦後70年という節目の年。世界中の子どもたちが安心・安全に暮らすために、大人は今、何をすればいいのか。平和研究の第一人者であり、世界200カ所以上で紛争調停を行ってきた「平和学の父」ヨハン・ガルトゥングさんと、学校で平和についての学習活動を進めている日本教職員組合青年部長の佐々木久美子さんにとりくみや実践についてお話を伺いました。

— 戦後70年を迎え、今、日本では「積極的平和」という言葉の解釈が問題となっています。

**ガルトゥング** 今の日本政府が使つてゐる「積極的平和主義」は、「平和学」でいう「積極的平和」とは全く異なる概念です(※1)。

「平和学」提唱の出発点は、戦争研究はいくらでもあるのに、なぜ平和研究はないのかという疑問でした。当時、この種の議論では、「いかに戦争を防ぐか」が最大のテーマでした。しかし、「平和」の反対は「戦争」ではありません。たとえ戦争がなくても、貧困や差別、人権侵害がはびこる社会は平和とは言えないからです。

そこで、私は平和を「暴力の不在」と定義し、戦争や紛争を「直接的暴力」、貧困や差別などを生み出す社会構造を「構造的暴力」ととらえました。そして、直接的暴力のない状態を「消極的平和」、さらに構造的暴力のない状態を「積極的平和」と定義しました(図表1)。平和学では、「平和」に絶対的な価値をおき、研究者は、貧困や差別なく、誰もが安心して暮らせる社会をめざして、研究と実践を続けています。

佐々木 そういう観点からすると、近年、日本の子どもの相対的貧困率が上昇傾向にあることが心配です。最新調査では6人が1人が貧困状態にあるとの報告が出ています(グラフ1)。経済格差の拡大が指摘される中、

現場の教職員からは、「交通費が払えないでの校外学習には参加しない」「野球がしたいけど、道具を買つたり、合宿に参加したりする費用がないので部活動はあきらめる」など、格差社会の影響が子どもに及んでいます。話を聞くことが多くなりました。

**ガルトゥング** この種の問題は、教育分野の課題にとどめず、社会・政治問題として捉え、社会全体でとりくむことが重要です。原因の一つには、経済システムをはじめ日本社会が米国化したことなどが挙げられると思います。現に、米国も子どもの貧困率が非常に高く、格差は大きな社会問題となっています(グラフ2)。

こうした問題の解決には、最近の中国の動向が参考になるでしょう。中国はここ20年で国際貧困ライン(※2)を下回る人の割合を約9分の1に減らし、底上げを図りました。まさに「積極的平和」を受けたとりくみの一つの成功事例といえます。

その後、技術提供や資金の貸し付けを通して、農業など生活のために必要な事業を行う協同組合のようないくつかの組織の設立を支援します。



ヨハン・ガルトゥング  
平和学の第一人者。1959年オスロ国際平和研究所を創設し、平和研究を主導。87年「もう一つのノーベル賞」といわれる「ライト・ライプリッド賞」受賞。93年、国際NGO「トランセンド」を創設。著書に『構造的暴力と和平』『平和への新思考』など。

佐々木 日本教職員組合では、「世界中の子どもたちに教育を受ける機会を」と、様々なプロジェクトにとりくんできました。NPOと連携して、アフガニスタンの教育支援や、インドの児童労働撲滅プロジェクトなどにも積極的に参加しています。

子どもたちにとつても、同世代の少年兵になつたりしている事実を知ることで貧困や紛争について考えるきっかけになつてているようです。教職